森林整備は諏訪湖のためにも

長野環境人士　自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん　対談　沖野外輝夫さん

沖野外輝夫さん 86
信州大学名誉教授・理学博士、諏訪湖クラブ会長

小林光さん

環境三昧半世紀

小林光　先生が諏訪にいらっしゃったのはいつごろですか。

沖野外輝夫　1973年ですね。

小林　半世紀になるんですね。それは偶然。私が環境庁に勤め始めた年でもあります。環境三昧半世紀。

沖野　諏訪湖とのかかわりは都立大学大学院で恩師である宝月欣二教授に出会ったのがきっかけです。宝月先生は諏訪湖を研究水域の一つにしていました。

小林　なぜ、水問題に関心を持ったのですか。

沖野　当時の東京周辺の水環境の悪化にショックを受けたことと、1950年頃の宝月先生を中心とする「諏訪湖の生物生産力研究」に興味を抱いたのがきっかけです。諏訪湖の研究チームに入って諏訪に通うようになったのが67年です。当時、諏訪湖ではアオコが増えていました。なぜこれほどアオコが増えるのか。興味がありました。

小林　諏訪に引っ越された理由は。

沖野　私が財団法人資源科学研究所（のちに国立科学博物館に吸収合併）の生態学研究室に研究助手として勤務していた時代に研究室長を務めた、私にとっての第二の恩師に当たり、信州大理学部長だった倉沢秀夫教授から声を掛けられたのがきっかけです。国際生物学事業計画（IBP）の淡水域部門の一つに選ばれていた諏訪湖の研究グループの研究成果を報告書としてまとめるよう依頼を受けました。諏訪湖の富栄養化が極度に進んでいた時期でしたので、報告書が完成した後も浄化に関わることになりました。あと、当時、名古屋大学教授で環境影響評価（アセスメント）の第一人者だった島津康男さんの著書を読みましてね。「地域の環境問題をやるなら住み込みでやらなければだめだ」と書いてありました。その考えに同意してしまったのも理由です。

小林　当時の諏訪湖の印象はいかがでしたか。

沖野　諏訪湖の生物群集の生産力の研究を行っていましたので、アオコがたくさん出る諏訪湖は研究対象という意味で言えば興味深かったです。アオコを減らすには湖の栄養をどうやって減らすかが課題でした。県が諏訪湖流域下水道豊田終末処理場（クリーンレイク諏訪）を整備し、チッソ、リンの処理ができる高度処理法を採用。アオコが抑えられるようになりました。

小林　アオコが出なくなって、がっかりしましたか？

沖野　いや、きれいになって良かったと思いますよ。計画時に皆さんに「下水道を整備すれば、諏訪湖はきれいになる」と伝えていましたので。もし、きれいにならなかったら夜逃げしなきゃいけなかったわけですが、幸い夜逃げせずに済みました。

小林　皆さんのやる気を引き出すには、やったら成果が出るということを明確に伝える。これは大事ですね。

沖野　諏訪湖の印象で言えばもう一つ、コンクリート護岸に覆われていたのも印象深かったです。湖岸の98％がコンクリートに覆われていました。2％は流入河川の河口といった状況でまさに人工的な湖でした。下水道整備の後は護岸の再整備が必要でしたね。

諏訪湖浄化の歴史ややり遂げる諏訪人の意識などについて語る沖野さん㊨と小林さん＝4月24日、諏訪湖ヨットハーバー

諏訪の人たちは研究者!?

学者と研究者

沖野　私はよく地域の方から「（沖野さんは）大学の先生らしくない」と言われました。「学者でしょ？」と聞かれると「学者じゃない。研究者です」と答えていました。

小林　学者と研究者は何が違うのですか。

沖野　現状をきちんと理解し、説明できるのが学者です。研究者は現状に疑問を持つところから始まり、自ら確認し、判断します。偏屈ですよね。正しいとされていることを否定してかかるのですから。ただ、そうしないと発展がないと思うのです。

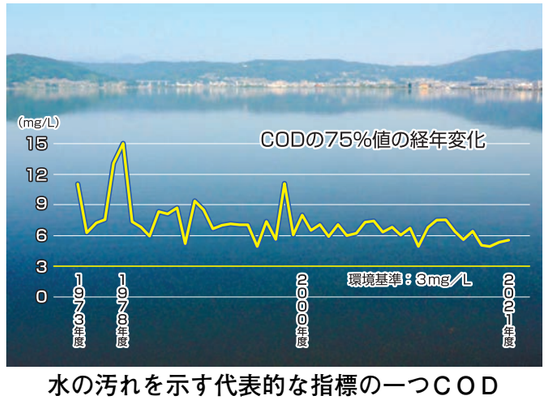
小林　確かに。そうでもしないと新しい真理は生まれません。

沖野　その意味で言えば、諏訪の人たちはどちらかというと研究者に近いのではないかと思います。

小林　諏訪に来て良かったですか。

沖野　良かったです。いろんな人に会えましたしね。それから結果が出ました。「住み込みでやらなければだめだ」と書かれた島津さんに感謝しないと。

小林　諏訪湖の上流部では何か対策はあるでしょうか。



水の汚れを示す代表的な指標の一つCOD（化学的酸素要求量）75％値の経年の変化（県諏訪地域振興局公表データより）

※COD（化学的酸素要求量）75％値　CODは水中の汚濁物質を酸化剤によって酸化するときに消費される酸素の量で数値が高いほど有機物が多く、汚れが大きいことを示す。75％値はCODの水質測定結果の評価方法の一つで環境基準の適否に利用される。全データを小さい方から並べた時に「データ数×0.75」番目の値をいう。県の諏訪湖での水質調査は毎月1回なのでデータは12個ある。この場合、小さい方から9番目の値が75％値となる。

諏訪湖のサクセス物語は良例

御柱祭と諏訪湖学習

小林　諏訪地方の文化的なアイデンティティーは御柱祭と諏訪湖学習にあるようにも感じています。地域のアイデンティティーづくりにどう寄与したのですか。

沖野　長野県は以前から公民館活動が活発です。諏訪地方に来て間もないですが、公民館の学習会の内容について相談を受けました。そこで湖の浄化と関連付けた講座を提案をし、6市町村の公民館連携で講座を行うことになりました。諏訪湖周辺の住民だけでなく、上流域の皆さんにも湖との関係を知ってほしかったからです。

小林　沖野先生は諏訪地方での人とのつながり方をどう考えていますか。

沖野　諏訪の方は一人ひとりが自分の意見をしっかり持っています。ですから、みんなが納得するような案をつくるのが難しかったですね。公民館講座では参加者の意見をしっかりと聞くところから始めます。もちろん、間違いは間違いだとはっきり伝えます。そのスタンスが大事だと思いながら取り組みました。

小林　いろんな立場の人たちが組み合わさると、成果も出せる。諏訪湖のサクセスストーリーは良い事例ですね。地域のさまざまな立場の人が諏訪湖にかかわり、手応え感じながら活動を進める。その一つ一つが重なり合い、諏訪湖が地域にとっての一層の宝物になっていく、ということですね。

沖野　農耕地から出るリンなどの栄養塩類を取るためのため池を上流部の休耕田を利用して造ればいいと以前から提言していますが、なかなか進みません。あとは川の途中で川幅を広げ、そこにたまった泥を取り出し、畑に戻す。昔は泥を肥料にしていたそうです。それから、森林も手が入ればもっと良くなると思います。森林を良くすることは諏訪湖にも、そして、その先にもつながっていくのです。

撮影協力＝ブルーウォーターヨットクラブ